

様式第 3 号

会 議 録

会 議 名 (付 属 機 関 等 名)		川西市参画と協働のまちづくり推進会議 令和元年度第 3 回 A 部会		
事 務 局 (担 当 課)		総合政策部 参画協働課		
開 催 日 時		令和元年 10 月 24 日(木) 午後 6 時 00 分から午後 8 時 00 分		
開 催 場 所		川西市役所 7 階 大会議室		
出 席 者	委 員	藤本真里(部会長)、加門文男、田中真、名木田絢子、西村牧子、 三善知子		
	そ の 他			
	事 務 局	総合政策部参画協働課 課長補佐、 同課主任 1 名		
傍聴の可否		可	傍聴者数	1人
傍聴不可・一部不可の 場合は、その理由				
会 議 次 第		1 開 会 2 議 事 (1) A 部会のテーマ 「(地域・市民活動に対して、)やる気があり積極的だが 取り組めていない人を巻き込んでいくには」 3 閉 会		

1 開 会

○藤本部長

誰に対してどんな提案をしていくのか、今回と次回でまとめ、12月の全体会を経て、その後の2回で、見せ方・伝え方の部分を議論したい。

提案内容は、網羅的である必要はなく、ターゲットを絞った提案を議論したい。また、以前ガイドブックがあってもあまり読まれていない事例があったが、それは書き手が読み手と同じ立場に立って一緒に取組もう、汗をかこうと読み取れないからだと思う。

前回の全体会で発表した解決策の内容をまとめた資料を作成しているので、皆さんと確認したい。

< 資料を全員で確認 >

2 議 事

(1) 「(地域・市民活動に対して、)やる気があり積極的だが取り組めていない人を巻き込んでいくには」

(各委員の意見)

- ・ 土日しか休みのない主人に、「どのような活動ならば参加するか」聞いたところ、「自分の子どもと一緒に参加して、子どもが喜んでくれる活動」と答えた。
- ・ ターゲットは、自治会・コミュニティなど地域活動に絞るのか、イベント活動など市民活動に絞っていくのかによって、提案内容は違ってくる。
- ・ 市民活動センターの登録グループでも横のつながりができていない。コミュニティでも横のつながりが無いのではないかと。
- ・ 地域での事業は関わる人間が固定化されており、特に自治会は硬い。そこには横のつながりが無いので、つないでいくためには広報活動をしっかりしないと行けない。ネットやSNSの活用のためには、若い方に広報をやっていただきたい。
- ・ 農村部のまちづくりにおいては、現在の祭りや事業に固執して、将来の子ども・孫の代のまちづくりを考えられていないところもある。次の担い手である、40・50代の方に将来のま

ちづくりを考えてもらえる機運が必要である。

- ・ コミュニティとは別に川西を良くしようとする方は、ポツポツいる。大和地区には、お母さん世代が集まって「DAIWA rks」というグループをつくり、大和地区を盛り上げようと活動している。ただし、コミュニティと連携はできていない。コミュニティの会議等に都合が合わない。今は、空き家を活用したニコカフェを利用して活動している。
- ・ 参加を募る際に「何時から」より「何時まで」を示すことが大切だ。また、駐車場が用意されているなども、特に男性にとっては重要な情報である。
- ・ コミュニティ活動は年間予定がきっちり決まっていて、気軽には取り組めない。それでも自分と異なるペースや考えの方に最初戸惑っても、その中で認められるとやりがいにつながる。
- ・ コミュニティや自治会は、一度事業の棚卸が必要だと思う。今はやめることができなくなっている。役員が集まらない、会議もままならない活動であれば、一度やましてしまうのも一つの考えだ。しかし、それができずにみんな苦労している。
- ・ 自治会に入っていないと「あそこの家は自治会に入っていない」と言われたり、不登校の子どもがいるのにPTAの役員をさせられたり、自治会に入っていないからゴミを捨てさせてもらえないから困っている人もいる。
- ・ 自治会は生活密着型だ。いざ災害等が起これば、自治会や近隣とのつながりが必要と実感できるが、今は個人の生活の安心・安全があるから自治会が求められなくなっている。しかし、自治会がしっかり機能しないと地域はよくなるしない。
- ・ 自治会に入っていないなくても普段から仲良くしているご近所さんはいる。自治会がないと災害時に困るだけでなく、日々の治安が悪化すると思う。
- ・ ただ、自治会はよろず相談所じゃない、お隣同士のトラブルは個人対個人の問題で解決すべきだ。
- ・ 人と人のつながりの切っ掛けは、何らかの共通点。それは飲み仲間でも子育て仲間でもいい、そのつながりを大切にして活動に結び付けられればいいと思う。
- ・ 今まで活動している人は、新たな人が入ってくるとこれまでの自分のテリトリーを侵される

と考え、反発してしまう。

- ・ 子どもが参加するイベントは、子どものステージなどを会場の一番奥にして、そこまでの経路に物販など親御さんに立ち寄ってもらう仕掛けをしている。ハロウィンイベントを行う際は民間事業者も巻き込んで企画している。事業者との交渉はしっかりした本部がやってくれる。スタッフは自由に活動させてもらえるし、自分の子どもが店長を出来たりイベントへの優先参加ができるメリットもある。こんなやり方で地域の行事を合わせることができればいいと思う。
- ・ コミュニティと自治会の関係も様々である。ただ、自治会が大きい地域はコミュニティの活動が控えめになるし、自治会が大きい地域もコミュニティ活動が盛んになると自治会の意義が問われてしまうので、上手くバランスをとって活動している。
- ・ 若い人が地域の年配の方に話すときに、他の地区の方に仲裁に入ってほしい。同じ地域の中だけだと、年配の方からは「自分たちはこうやってきた」と言われてしまう。
- ・ 自治会長が変わった時に引き継ぎがなくて、とても大変そう。次の世代につなぐ情報が大切だ。
- ・ やる気のある若い方を発掘して支援できる体制・組織を作らないといけない。特に、若い方に任せられる何かを見つけて、年配のものが任せていかかないといけない。
- ・ やる気のある年配の方は、福祉の関係で横のつながりは自然とできてくる、若い方を子ども中心としたイベントなどを切っ掛けに声掛けをして掴んでいかないといけない。
- ・ せっかく手伝いに来てくれた若い方にちゃんと参加してもらえるように行事のマニュアル化、チェックリストの作成が必要だと思う。若い方が何をやったらいいのかわからずに、気だけ遣って帰ってしまうことが一番残念だ。
- ・ そもそもイベントや行事に参加するきっかけは、情報である。SNSは若い人に対してとても効果的である。
- ・ 地域のイベントなどの情報を、まずSNSで見えて知る、次に現場に行って知る、その2点がないと人の接点がない。
- ・ 地域の方を対象にSNS教室を行ったり、地域の情報を拡散してくれた方にプレゼントをす

るなど、情報発信・伝え方の工夫が必要だ。

- ・ 人を募る際は何をどのように手伝ってほしいのか細かく伝えて募集することが大拙だ。
- ・ 情報を見た方が、理解できる・行きたいと思えるくらいにハードルを下げる。
- ・ 大阪の市民参加研究会が作成した「豊かな社会を実現する市民参加のすすめ方」という本によれば、ボランティア等の活動への参加のタイミングは、ライフステージの変わり目やお誘いがあった時だそうだ。
- ・ 重要なのは、お誘いの質、仕方、タイミング、誰が誘うのかだと思う。そのうえで、参加してくれた人に明確な役割を与えることだ。折角来てくれて何も役割がない、主体的に関わってもらえないのはダメだと思う。参加した方が、終わった後にどういう活動ができたのかを話せることが参加した実感にもつながる。
- ・ 情報発信の媒体は様々で、媒体によって届く相手も様々である。SNSも紙媒体のチラシや広報も両方やらないと効果は低い。
- ・ 自治会も元々は、日々の生活をよくするために主体性を持ってみんなで協力して活動していたと思う。長く活動しているうちに、人から仕事のような思われ、感謝もされなくなり、やっけていて当たり前のように思われてくる。
- ・ 自治会長は地域の裏方になりがちで、その頑張りに目が向けられることは少ない、子どもの登下校の見守りも勝手にやっていると思っている人もいる。このような頑張りを知ってもらうことも大切、知らない人ほど苦情を言う。
- ・ どういった情報をどう発信するかは、行政やコミュニティ組織の場合公平性の問題がある。第三者が発信するのがいいと思う。

3 閉会